

インクルーシブな社会を実現するための
対話の場の創出に関する実践的研究—イ
ンクルーシブ・キャンパス/コミュニティ・
プロジェクト (ICP)

神吉宇一、明石修、木下大生、
清水潤子、友田奈津美、渡辺裕一



本研究では、どのような状況にある人も自分らしく生きていくことができるというインクルーシブ社会を実現するために、その基盤となる対話の場を創出することに取り組んだ。取り組みは二つに大別でき、一つ目の取り組みは「インクルーシブ・ダイアログ」という場を設定し、参加者同士が対話を通してインクルージョンについて考えることを目指した。二つ目の取り組みは、「食」をテーマに多様性や持続可能な社会のあり方を考えるために「じゅんぐりマーケット」の取り組みに参画をした。

インクルーシブ・ダイアログは、2023 年 11 月、12 月、2024 年 1 月にかけて計 3 回実施した。1 回目は障がい者、2 回目は性的マイノリティ、3 回目は外国人・外国ルーツの人をそれぞれ対話のテーマとした。

具体的な取り組みとして、まず焚き火を囲むなど、「やわらかい」形でチェックインを行い、次に、当事者や専門家から、テーマに関する簡単な情報提供を受けた。その上で、それぞれのテーマについて参加者各

自がどのように考えているか、対話を行った。参加者は学年や専門、立場等多様であった。最後は軽食をとりながらさらにゆるやかな形で相互の対話を活性化することをねらって取り組んだ。

チェックインから軽食までの一連の流れの中で、安心して自分の考えていることを吐露できる場づくりを行うことを特に重視して取り組んだ。参加者は、1 回目 19 名、2 回目 19 名、3 回目 22 名、計 3 回で延べ 60 名、複数回参加した学生や教職員も少なくなかった。今後、参加者に対するフォローアップインタビュー等を行い、場の価値について分析を行いたい。

じゅんぐりマーケットはサステナビリティ学科が中心となって取り組んだイベントである。本研究の一環として、食の多様性と食の循環を考える取り組みを行なった。気仙沼で水揚げされ、フカヒレのためにヒレだけが使われているサメ肉を活用したサメバーガーを販売しているサメやや、江東区内でヴィーガン向けお菓子を製造販売している bon bon bake shop 協力を受け、食の多様性や食の循環を考えるきっかけとなる出展を行なった。

インクルーシブ・ダイアログの取り組みは今後も継続して行くとともに、その知見をもって、本学中長期計画チャレンジ 4 への貢献も行なっているところである。